

第一章

——20XX年、日本。

心身を蝕む膨大な仕事と物価高に疲れ切った日本人のために、ある法律が作られた。

「国家心身健康保全推進法」。

日本人の心と体を守るために、三大欲求を満たすためのサービスに政府から莫大な補助金が支給されることになったのだ。

食欲。外食産業や農家の売り上げはうなぎ上り！

睡眠欲。寝具産業、ホテル業界も大助かり！

そして最後の欲求、性欲。

これに関わる仕事がもう大成長した。

「性欲を満たすことは心身の健康に重要」と政府のお墨付きがもらえたことで、性欲解消のためのお店が急増。そして、気持ちよくなるための性具の研究も爆発的に進み、エロ漫画だけのものだった、やれ媚薬だの、触手だの、えっちなことと出られない部屋だのが現実のものとなり、日本人はお店でとつてもえっちなことを楽しめるようになったのだ！

そして男女問わず、そんなお店を利用することは「当たり前」になり、ストレス解消のために成人が気軽に利用できる場所へとなっていた。

——そんな世界のためにもえっちなお店のお話。

「それ、ロマンス詐欺です」

「え！　そ、そんな！　だって私のこと愛してるって！」

「あなたのことを本当に愛してる男は事業資金が足りないから300万貸してくれなんていいません。本当に男を見る目がないですね。やり直し」

「そんな…！ そんなあ！」

キラキラと輝くシャンデリアが人々の欲望を照らし、オム・ファタールたちがふかふかの真っ赤な絨毯が惹かれたフロアを闊歩する。数ある性欲解消専門店の中でも一番人気で、売り上げもほかの店の追随を許さない「ハニーピンキー」は今日も多くの客でごった返していた。見た目も一流、テクニックも一流の男たちが集められていて、一見さんお断りの紹介制。その代わり、「天にも上る程」の快楽を保証していて、豊富な性具オプションが大人気の超高級店のトップセラピストたちは、芸能人にも負けない程に客を惑わし、翻弄する。

そんな店の一角、パーテーションで仕切られた一番端の一番古いソファの一番狭い席で真っ青になっているのは、額が見える程の黒髪にまん丸の瞳、小さ

な鼻を持つ田代あずき、28歳、独身、絶賛婚活中の女だった。

「ロマンス詐欺に引っかかるの、これで3回目ですね。ちよつとはその小さな頭で学習してくださいよ」

「ご、ごめんなさい…」

そんなあずきの隣で、ふーっと自分の美しく整えられた爪に息を吹きかけている、ピンク髪の身長も胸もでっかいとんでもない美人顔のデカ男が店のトッブセラピスト兼オーナーの英知だった。シミ一つないシルクのような肌、真っ白な首輪と手袋、スタイルの良さが分かるレザーのズボンと高いヒールを身に付けた英知は、ソファに体を沈み込ませ、長い長い足を組んで、まるで水を飲むかのようにコニヤックをストレートで喉に流し込んでいる。

「このダメ女、アホ女、バカ、ちんちくりん」

「うええん、許してください、英知さん！」

「触らないでください。ちんちくりんが移る」

「うえええん」

「まあ英知さん、あずきで遊んでんの？」

「うん、さつきからストレス解消で虐めまくってる」

「ああ、この前の客、金ならいくらでも出すから自分と付き合ってたってうるさかったもんなあ。そのストレス？」

「そ！」

鍛え上げられた体を魅力的に見せる布面積が極端に少ない服を着た男たちが客とのセックスの合間にあずきたちの席にやってきては、おしゃべりしたり、お菓子を摘まんだり、居眠りをしたりしている。

「俺、これから2時間コースが入って大変なんですから、イライラさせないでくださいよ。ストレス解消にセックスしますよ？」

「やだあ…セックス怖い…」

むぎゅうとあずきの頬を片手で挟み込み、ひっくり声で脅す英知に、あずきはめそめそと泣き始める。そんなあずきに、英知が「チッ!」と大きく舌打ちした。

「ガキでも見せつけオナニーが合法化してるこの国でよくもそんなバカみたいなこと言えますね、ムっかつく」

「ひええん、たしゆけてえ!」

英知が性具として使用しているどこにしまわれているのか、その技術は一切分からないネロネロドロドロピンク触手が英知の背後から現れ、ぬるぬる♡とあずきの唇を撫でる。

「あゝ、イライラする。ほら口開けてくださいよ。触手啞える無様な顔を俺に見せて、少しはストレス解消に協力してください」

「ジン〜〜〜！」

あずきが必死に唇を閉じて、いやいやと首を横に振る。

「開けてください。口の中に、触手の発情ドロドロ媚薬ご馳走してあげますから」

「ジン〜〜〜〜〜！」

英知の美しい指があずきの下唇にかかり、そこをこじ開けようとした時。

「英知さん、ご予約のお客様がお見えです」

「チィ!!」

先ほどよりも大きい舌打ちをした後、英知が立ち上がる。その顔はあずきを虐めている時のしかめっ面とは打って変わり、にこやかなそれに変わって

た。

「さあて、行きますか」

予約客を迎えにフロアへ出て行く英知を見て、あずきが助かったと安堵の息を吐いた時。

「勝手に帰ったら家で犯します」

「ひいん！」

あずきは盛大に泣いた。

「あれ〜？ あずきがいる」

「万緒君…！」

黒髪パーマのまつげ多めのゆるふわイケメンがセックス後の気だるげな雰囲気のまま、あずきの席にやって来た。

「なあに、オーナーに呼び出されたの？ ストレス解消で虐められた？」

「なんで分かるのお……！」

「大体その流れでしょ？ てか、英知さんに隙を見せたあずきが悪いでしょ、絶対」

「そんなあ……だって、処女を虐めるのが趣味だなんて知らないもん！」

あずきは3か月前のことを思い出していた。

「え？ え？ た、退去ですか……？」

「うん、このアパートも古いからねえ。住んでるのも、あなたともう一人、年配のおじいちゃんだけだったんだけど、この前亡くなってね。その人のために残ってたようなもんだから、いなくなったのなら、もうこのままにしとく理由もないんだよ。立地もいいし、最先端のセキュリティシステムを導入したファ

ミリー向けの高級マンションになるみたい」

「ち、ちなみに…家賃はいかほど…？」

「こんぐらい」

「ぎゃあ！」

大家のおじさんに提示された金額に、あずきは思わず悲鳴を上げた。

「AIシステムを中心としたインフラ設備の修理の仕事…だったっけ？ 女性にしては大分いかつい仕事ってしてるなあとは思ってたけど。こんな所に住んでるんだから、お給料少ないんですよ？ 悪いけど、出て行ってもらって…」

「こ、こ、困ります！ 私、ここしか行くとこないんです！ おっしやる通り、給料も低いですし、家族もいないので、身寄りもないし、学もないし！

ここ追い出されたら、この街で生きていけないです！ この街を離れたら、仕事もなくなるし、そしたら、ほんとに無一文になっちゃいますぅう！」

「うおおお！　そ、それは可哀そうだけど、も、もう、ここに建設予定のマンシヨンのオーナーは、僕じゃないから、どうしようもないよお！」

「だ、誰なんですか、そのオーナーって！」

「た、頼もう！」

「オーナー、道場破り来ました」

「殴って追い出さない」

「女の子です」

「はあ……どんな頭のおかしい女ですか」

あずきが住んでいるボロアパートのオーナーに、次の建物の所有者の情報をなんとか聞き出したあずきは、その足で、ハニーピンキーにやって来た。まだ夕方で開店作業中の店内に勝手に入ったあずきは、大家に聞いた特徴である

「ピンク髪のどえらいイケメン」である英知をすぐに捕捉し、その男の足に縋りついた。

「お願いしますうゝ、私もマンションに住まわせてくださいい！」

「うわ、なに、怖いの来た」

英知はこれでもかと顔を顰めて、足をブンブン振り回し、あずきを引きはがそうとする。

「ちょっと触らないでください。馬鹿が移る」

「馬鹿じゃないです！ 住むところに困ってる善良な市民です！」

「善良な市民は開店前の店に頼もうなんて言って入ってこないんですよ」

「むぎい！」

嫌そうに自分の足に絡まった自分を解こうとする英知に、あずきは必死に訴える。

「お願いします！ 何でもしますから、新しいマンションに住まわせてください！」

「ああ、新しく建てるマンションの入居希望ですか？ だったら、俺じゃなくて不動産屋に行ってくれませんか？ 大体まだ空きがあるでしょうに」

「今のアパートの家賃で住まわせてほしいんです！」

「今のアパートって…あの、野良猫しか住んでないボロアパートですか？」

「まだ私が住んでるんです！」

「なおさら触らないでほしくなりました。ばっちい」

「ばっちくもないもん！」

えぐえぐと鼻水まで垂れ流しながら、あずきは必死に頼み込む。

「なんでもします！ マンションの掃除とか無償でします！ 廊下の電球の取り換えとかもします！ なんでもしますからあ！」

「そんなものの業者に頼みますよ。俺が最上階に住む予定なんですから」

「うわーん！　おうちがなくなったら生きていけない！　お仕事もやめないといけない！　したら何も買えない！　空腹で死んじゃう！　まだ、えっちもしたことないのにいい！」

「ほお…」

もう一度足を振り回そうとしていた英知の動きがピタリと止まる。

「づうう…まだ死にたくないよお」

「ちよつと顔、見せてください」

「むぐう！」

突然顔を掴まれ、無理やり上を向かせられる。

「な、なんでひゅか？」

「ふーん、だいぶ童顔ですけど、まあ、許容範囲か…」

「許容範囲…?」

あずきが首を傾げると、英知がにんまりと笑った。

「俺のマンションに住めるんだったら、何でもしてくれるんですよ?」

「え…あ、は、はい! もちろん、掃除洗濯、お料理、なんでも!」

「処女なんですよね?」

「へ…?」

「処女! なんですよ! よね!」

「は、はい!」

至近距離まで近づいてきて、笑顔で圧をかけてくる英知に、あずきは慌てて頷いた。

「証明書は?」

「あ、えっと…ちょっと待ってください…」

あずきがごそごそとポケットの中から財布を取り出し、プラスチックのカードを取り出す。

「ど、どうぞ…」

「へえ……」

顔写真付きのカードを見て、英知の笑みがさらに深くなる。

広く一般化した性欲解消専門店の利用には、たった一つだけルールが設けられている。

——処女、童貞は利用できない。

これは法律ができた後、性欲解消専門店が爆発的に増えた後に導入されたルールだった。当時、一度も性行為を経験しないまま、見目麗しい男女がセックスに応じてくれるサービスを利用した客たちの多くが、「ガチ恋化」してしまったのだ。店のキャストに交際や結婚を迫り、店舗運営に支障をきたす事態に

まで発展し、業界の不満が爆発。営業をボイコットをする店が増加し、政府が慌ててこの条件を法律に盛り込んだのだ。

その際に作られたのが、この「童貞・処女証明書」で、一度でも性行為をするとどういう理屈か分からないが、顔写真の下にある「処女・童貞」の欄に入っているチェックマークが消える仕組みになっている。

「…確かに処女欄にマークがありますね。…年は？」

「え？に、28歳です…」

「その年まで処女とは…」

「だって、だってだって、エッチって怖くないですか!? 自分の中に他人のものが入るなんて絶対無理です！ 怖いです！ 絶対痛いです！」

「へえ…」

「なあ、あれ、止めなくていいのか？」

「英知さん、生粋の処女厨だろ？ 見ろよ、もう捕食者の目になってるじゃん」

「うわ…触手出てる…うねうねして、あの子、狙ってる…！」

「うるさいですよ。仕事に戻りなさい」

「「うっす！」」

開店準備中の3人がそそくさとその場を後にする。英知は床にペタンと座り込む。あずきの前にしゃがみ込むと、あくどい笑みを浮かべた。

「俺のマンションに住みたいねえ……、いいですよ」

「ほ、ほんとですか！」

あずきの顔がぱあっと明るくなる。

（なんか冷たくて怖そうだったけど、結構いい人なのかも……！）

「そ、それじゃあ私、なんでもしますね！」

「なんでも？」

「はい！」

「ほんとに？ なんでもしますか？」

「もちろん！」

「じゃあこちらの契約書にサインを」

「はい！」

どこから取り出した電子ホログラムの契約書に、あずきはニコニコ顔でサインを書き込む。

「書きました！」

「はい、ありがとうございます」

「ち、ちなみに、何階に住めるんでしょうか？」

今まで一階のボロ部屋に住んでいたあずきが、少しだけワクワクしながら尋ねる。

「ああ、階数ですか？ 最上階ですよ」

「さ、最上階!? や、やったあ！ あ、れ…？ で、でも最上階って確か、あなかが住むって…」

「そう、俺とあなたが住む部屋です」

「え…？ い、いや、あの、流石に、おなじ部屋に住まわせてもらう訳には…」

「俺の性奴隷になるんだから、一緒に住むに決まってるでしょ？ 俺がしたくなったら、いつでも応じてもらわないといけないんですから」

「……せい、どれい？」

「性奴隷」

「せいで、れい？」

「性奴隷」

「な、な、何言って！ 性奴隷なんてなりません！ ば、馬鹿にしないでください！ もういいです、か、帰ります！」

あずきが顔を真っ赤にして店を後にしようとする。

「おーっと、いいんですか？ 契約不履行の場合、あなたは俺に賠償金1億円を払う必要がありますが？」

「……いち、おく？」

「一億」

「いち……おく？」

「一億」

「やだああああ！」

「馬鹿との契約は簡単で助かります」

「たすけ、たすけてえええ！」

「さっさと引っ越し準備しといてくださいよ」

「うえええええん！」

「うう…、こんなことになるんだったら、さっさと処女、散らしとくんだったあ！」

「そうしたら、今頃、家もなくなつて悲しい路上生活だったかもね」

「そんなこと言わないでえ！」

めめめそ泣き続けるあずきを笑いながら、指名がきていないキャストたちは

おしゃべりしたり、ゲームしたりしている。

「うう…ん、あれ？」

するとあずきは、ソファの一番端の席で背もたれに頭を預けて寝ているキャストに気付いた。

「…」

おしぼりと水、誰も手を付けてないフルーツを小皿にとり、あずきはそのキャストの所へと向かう。

「大丈夫ですか？」

「…え？」

「熱…？」

男の前にしゃがみ込んだあずきが、その額に手を当てる。

「ん……」

「熱い…ですね。苦しい？」

「…大丈夫、ちょっと、疲れただけ…」

サラサラの金髪が美しい、入って半年の青年がにっこりと笑う。

「ダメですよ、今日は、お仕事したらダメです」

「いや、大丈夫だって。大したことないから…っひゃ！」

「ダメですよ」

あずきが冷たいおしぼりを青年の額に押し当てる。

「エッチって体力使うんですよね？ 英知さんがぼやいてましたから。だから、今日は大人しくしてましようね？ ほら、フルーツなら食べられます？」

「いい…から」

「もう、食べてください！ 薬も持ってきますから」

「いいってば！ こんなの一りで…！」

「良くないの！」

「むぐう！」

あずきがぎゅうつと青年の頭を胸に抱き込む。

「む、む、胸が……！　ぐるじい……！」

「あなた、確か一人暮らしですよ？　体調悪いと、一人でいるの嫌だったから、お店来たんですか？」

「そ、そんなんじゃ……！」

青年の顔が真っ赤に染まる。

「なんだよ、お前、体調不良かあ？」

「さっさと言えよなあ、おい、誰か上の階に住んでて、今日休みの奴呼んで来い、こいつ体調不良だって。部屋、空いてるだろ、休ませてやれ」

「誰か、買い出し行け」

「っ！　だ、だから俺は…！」

「一人は寂しいですもんね、よしよし」

「っぐう♡」

顔も体つきも細く小さいのに、胸だけがふんわりマシュマロビックサイズなあずきの笑顔に見惚れた青年が、無意識のその胸に頬ずりをする。

「ひゃあ！」

「……なあにママセックスしてるんですか」

「きゃんっ！」

突然、しゅるり♡とピンクの触手があずきのTシャツの胸元から中に侵入し、くにゅう♡と乳首を押し込む。

「え、え、英知さん！」

「処女のママセックスとかやめてください。普通に勃起します」

「やだあああ！ 触手ぬめぬめするう！」

「このプレイに、お客様がいくら払うと思ってるんですか、この間抜け」

「ひいん！」

ぶびゅう♡と音を立てて、服の中に侵入した触手の穴からぬめぬめローションが噴射される。

「やだあ…！ セックスなんかしてないのにい！」

「よしよしなんて言葉はもうセックスなんですよ。これだから処女は」

「あう……」

ソファに座ったまま前かがみになるあずきの背後から真っ白な腕が伸び、あずきに抱え込まれていた青年の体を後ろに押しつける。そしてその手をあずき

の服の中に滑り込ませ、触手に虐められていない方の胸をもにゆもにゆ♡と揉みしだき始めた。

「っあう♡んう…や…っああ♡やだ…エッチなことしないで…ばかあ♡」

「ご主人様に黙って、ほかの男とママセックスなんかするからでしょう。舐めてるんですか？」

「ママセックスなんてしてないもんう！」

「男の顔を胸に埋めさせてよしよしは立派なセックスです」

「はうう♡」

2時間の「触手でぐちゃとろ、あまあま溺愛デラックス交尾コース」を完遂した、まだセックスの色香が残る英知が艶めいた吐息を後ろからあずきの耳朶に吹きかける。

「ひいん♡だ、誰か、たしゆけてえ…！」

あずきが必死に周囲の男たちに助けを求めるが、万緒以外の男は全員顔を逸らすか、「あ、指名入った」と言ってフロアへ足早に出て行ってしまう。

「俺とのセックスは承知しないのに、ほかの男とセックスするなんて、性奴隷の分際で随分舐めたことしますねえ」

「やあん♡」

英知の指と、細くなった触手の先端が、あずきの乳輪に埋もれた陥没乳首をほじほじ♡と刺激する。

「んぐっ♡はうう…や…あ、たしゆけ…やだあ…ほじほじやだあ…っ♡」

「家では涎垂らしてあんあんしてるくせに。いつになったら処女おまんこ、ほじほじさせてくれるんですか？」

くちゆくちゆくちゆくちゆくちゆくちゆくちゆくちゆく♡

「あんうう♡♡」

粘液を纏った触手と指が、乳首を刺激するせいで、埋もれていた乳首がプルン♡と外に出てくる。

「恥ずかしがり屋の乳首、やっと出てきたんですか？ 子供じゃないんだから、かくれんぼとかしないでください」

「きゃひいっ♡♡♡」

英知の指がぎゅううう♡と乳首をつまみ、もう片方を触手がぎちゅうう♡と締め上げる。

「やああ♡いぐ♡イキましゅ♡ご主人様、イキましゅ♡乳首ほじほじぎゅっぎゅで、英知様の性奴隷のあずきちゃん、子宮きゅんきゅん♡させて、下品アクメしましゅ♡」

「んなっ!!」

英知に突き飛ばされた青年が顔を真っ赤にして、下品な言葉を吐き出すあず

きを見つめる。

「あ…あ…や、やだ、ちが…違うの、違う、違う、違うう♡見ないで…、見ちゃだ…やだあ…っ♡」

「あ…う…」

「なあにほかの男誘惑してるんですか、犯しますよ？」

「ひううっ♡」

「あなたをめちやくちやにできるご主人様の名前を今すぐ言いなさい」

「英…ち、えいち…さん…えいちさ、んですう♡んうう♡」

「そう、英知さんですよね？」

「ジおおおおおお〜」

口をすぼめて、汚い喘ぎ声を出し始めたあずきの目を、英知が大きな手のひらで塞いだ後、冷たい視線を青年に向ける。

「体調不良なら今日は休みですね。上の階のキャスト寮の部屋に空きがありますから、そこで休みなさい」

「え、英知さん…お、俺…」

英知が青年の膨らんだ股間を見てクスクスと笑う。

「こんなことで勃起するようでは、まだまだキャストとして未熟です。…行きなさい」

「っ、は、はい…」

青年が熱に浮かされた顔のまま立ち上がり、フラフラと上階行きのエレベーターに向かっていく。

「英知さん、仕事の前にキャストに勃起させないでもらえませんか？」

万緒がフルーツを摘みながらのんびり言うと、英知はぢゅるぢゅる♡と音を立ててあずきの耳朵を舐めた後、素知らぬ顔をした。

「『君が指名してくれたただけで勃起しちゃった♡』くらい言えないと、一生俺は抜かせませんね」

「…二時間セックスしまくった後に、よくセックスする気になりますね」

「処女は別腹です。ほら、お胸だけでイクイクしなさい」

「ああああ♡イグッ♡イグイグ♡やあ…だあ…ごわいごわい♡」

「全く、子供でも今時そんな情けないこと言わないですよ」

心底呆れた顔をして、英知が溜息を吐いた後、あずきの口におちゅう♡と触手を突っ込む。

「おごお♡」

「うるさいんで、これでもちゅばちゅばしててください♡ほら、イケ♡イケ♡イケ♡」

「んぐうう♡ううう♡んううううううう♡♡♡♡♡」

(ダメ、ダメ、ダメ、乳首、ダメ…ダメダメ…だめえええ♡)

「んごおおおお♡♡♡♡」

びくびく♡と痙攣しながら、胸をぐん♡と突き上げ、あずきが絶頂する。
かくかく♡と腰をへこ尽かせ、じゅわああ♡と愛液をこぼしてアクメするあずきを、英知が目を細めながら見下ろす。

「ぐぐ♡ぐぐ♡♡ぐぐ♡んぽおお♡はあーっ♡はあーっ♡」

にゅぽん♡と音を立てて口の中の触手を抜き取られ、一気にあずきの体から力が抜ける。

「う…え…うえええん」

「何も確認せずに契約書にサインする恐ろしさが学べて良かったですね？」

「うう…うええ…怖い…英知さんのほかあ…うああああん」

激しく泣きじゃくり始めたあずきを満足そうに見ながら、英知が前に回って

くる。

「家で続きしましょうか。処女の泣き顔がこの世の中で一番興奮しますし」

「も、もう泣かない、泣いてないですう！」

「なら泣かせます」

「鬼畜う……！」

あずきの体をひよいと抱き上げ、当たり前のように横抱きにした英知が「今日
日はこれで帰ります」と裏手の出口へスタスタと歩き始める。

「あと3件、予約が入ってますよ？」

「全員、明日以降に変更済みです」

「……はぁーい、お疲れさまでしたあ」

優秀なスタッフである万緒は何も言わずに挨拶だけにとどめたのだった。

「ぐえ、ぐえええん」

「いつまで子供みたいに泣いてるんですか。触手でおまんこ閉まらなくなるまで犯してあげてもいいですよ？」

「怖いと言わないでください！」

えぐえぐと泣きながら、あずきは英知の車の助手席に乘せられる。溜息を吐きながらあずきのシートベルトを付けてやった英知は、運転席に乗り込み、車を走らせる。

「英知さんの家、帰るの嫌です…！」

「帰りますよ。続きするって言ったでしょ？」

「やだ、やだやだやだ、しない！　したくないです！」

「一億」

「うわぁぁん！」

とうとう、ずずずと鼻水まで出てきてしまったあずきを見て、耐え切れなくなつたかのように英知は声を上げて笑い出した。

「あつはつは！　ほんとに……子供みたい……っ！　んふ、あははははは！」
「虐めてるのは、えいぢさんじゃないですがあ！」

「あなたが処女なのが悪いですよ。どっか適当な男で処女を捨てていれば、俺にこんな風に虐められることもなかったのに」

「横暴……う……！」

「あはは！　ほら、もう、鼻水なんか出さなくてくださいよ、情けない」

しゆる♡と英知から触手が伸びてきて、あずきに鼻のあたりをコスコス♡と優しく擦る。

「うえ……んぐ……うええ」

「触手……じゃなぐで、ティッシュとか、ください……！」

「処女の体液もつたいないですからね」

「あ、だ、だめえ！」

にゆるん♡とあずきの鼻水を拭い取った触手が英知の方へ戻っていく。何かを察したあずきがその触手を掴もうとするが、ぬめぬめしているせいで滑ってしまう。

「ん♡おいひい…」

「や…やだぁ！ 鼻水なんか口に入れないでください…！」

「んむ♡んう…ふ…んう♡」

「だめええ！」

運転しながら酩酊した顔で触手についたあずきの鼻水や涙を味わう英知に抗議しながら、あずきが必死に触手を引っ張る。

「だめえ、だめだめえ…！ ばっちいです！ いつも、ばっちいって言うくせ

にいい！」

「んう…ふ…んっ♡」

「っ、や、やあん♡♡」

あずきが英知に必死になっている隙に、一本の太めの触手がこっそりとあずきの股間に近付く。それはふるり♡と震えて表面を細かいイボイボに変化させると、にゆるう♡と音を立てて、あずきのパンツの中へと侵入してしまった。

「な、なにっ…や、ああ！ 触手、入って…！ やめで、英知さん、やめでえ！」

「ふう、美味しかった、ご馳走さまです」

「あ、あ、あ、あう…うううううう…♡♡♡」

ぞりいい♡とねとねとに湿った触手があずきのまん筋を擦りあげる。あずきはクン♡と首を上にあげて、目を見開きながらガクガクと体を痙攣させた。

「な、に…なに、これえ…ツブツブが…ゾリゾリい♡って、触られると、きちゆいところ、全部擦ってくる…♡や…あ、ああ、あああああ…♡♡」

ぞりい♡ぞりい♡ぞりい♡ぞりい♡ぞりい♡ぞりい♡ぞりい♡

「やああああ♡やめで、運転中…ですっ…んう♡」

「触手は俺の思考を読み取ってほぼオートモードで動いてますので、運転に支障はありません。ですので、気にせずにぞんぶんにイボイボおまんこオナニー楽しんでください」

「あうううう…♡」

（やだ、やだ、ぞりぞりい♡って、クリトリスのところ、いっぱい擦ってくる♡触手全部がイボイボだから、いつまでたっても気持ちいの終わらない。死ぬ…死んじやう…やだああ♡）

「あっっ♡う♡う♡う♡う♡イグイグ♡いぎ…まずう♡」

「イク時は名前を呼ぶように躡けたはずですけど？」

「んやあああ！♡♡」

触手の先端の空いた穴に、ぬぷ♡と勃起クリトリスが沈み込む。

「や…あ、い、や、いや…です…、許して…許してください、ちゃんと呼びます…名前、呼びます…からあ♡」

「ダメです。覚えが悪いんですから、後で言ってもすぐに忘れてしまうでしょう？ 犬の躡けもそうですが、悪いことをしたその時に叱らないと伝わらないんですよ」

ビィィィィィィィィィィ♡♡♡

「かつ…はあ♡♡♡」

むちゅう♡と触手穴でクリトリスを包み込んだ触手がバイブのように振動し始める。重いバイブ音が鳴り始めると同時に、あずきの足がぴい♡とまっす

ぐに伸びた。

「足ピンやめなさい」

「う♡お♡お♡お♡ん♡お♡お♡お♡♡♡♡♡」

「やめなさいってば」

「あぎっ♡♡♡」

触手穴の中の構造が変化し、まるで歯のような形のイボが、あずきのクリの先端に嚙みつく。

「あぐ…うっ♡う♡お♡お♡お♡お♡お♡お♡お♡お♡お♡」

かみかみ♡とクリ先を何度も甘噛みされながら、ビィィン♡とクリ全体を振動させられ、あずきのまんこからはプシプシッ♡と潮が噴き出し、助手席をびちゃびちゃに濡らしていく。

「この車も高いんですよ？ あなたが一生かかっても買えないようなお値段の

車なんです。それなのに、ジョッジョッっていっぱい潮だの愛液だの噴き出して。恥ずかしいですね、あなた。弁償できます？　できますか？」

「んぎゅうううう……♡♡♡」

今度はぢゅぽぢゅぽ♡と音を立てて触手が上下に動き始める。ねとねとの粘液を吐き出されながらのクリフェラに、あずきはがくがく♡と体を震わせながら「ごめんなひゃい…ごえんなあい、ゆるじで…ゆるじでぐださい、えいぢさん、えいぢさん♡♡♡んおおおおお♡♡♡」と聞く人によっては不快に感じる程の無様なオホ声で謝罪し続ける。

「……たまりませんね」

しかし英知は、ちらりと視線を向けた後、ゴクリと唾を飲み込んで、うつとりとした表情で笑う。

「犯してあげたいんですねえ。子宮口がバカになって、一突きされること

にイグイグウ♡って無様な声が出るくらいセックス漬けのバカマンコにしてあげたいんですけど、ダメなんですかねえ」

「やあ…あああゝ♡♡」

太い触手がするする♡と伸びてきて、あずきの視界を目隠しのようにになって塞ぐ。

「ね？ まんこの表面スリスリしてるだけじゃ足りないでしょ？ おまんこの中に挿れていいですか？ 気持ちいですよ、おまんこ肉をカキカキホジホジされるの。足がガクガク♡ってなって、頭の中『きもちい♡』ってことしか分からないくなりますから♡ああ、大丈夫♡処女膜は破らないように触手の太さと長さを調節します♡太いのはほんの入り口だけで、あとは細くてながーいのにしてあげますから。ポルチオは舐め舐めしたいので、先端をほっそい触手いっぱいにして、子宮口が粘液でべっとべとになるまでペロペロしてあげますよ」

「んお♡おお♡おお♡やめ、で、いつぎゅう♡えいちさん、えいちざん、イグイグ、イギまず…！」

「ダメです」

「あ…う…あああ、なんで…なんでえええ…！」

あずきが口をハクハクと開け閉めしながら、絶頂を迎えようとした瞬間、体にまとわりついていた全ての触手がしゅるる♡と離れて行って、英知の背中あたりに消えていった。あずきは目を見開いた後、ぐにゃあ♡と顔を歪ませて、顔を両手で覆い、咽び泣き始める。

「ひどい…ひどい…ひ、どい…よお♡酷い、酷い、ひどい…ばい…♡うああ…うええええん…！」

泣きじゃくるあずきの声を聞きながら、英知はクスクスと笑い始める。

「自分だけ気持ちよくなってるの、ズルいですよね？ 俺は自宅に帰るために

一生懸命運転しているのに、自分だけ触手と甘々溺愛オナニーですか？」

「何…言って…っ！　これは、英知さんが…！」

「あらら、人のせいですか？　自分だって、ポルチオ、触手舌でネロネロ舐められるの想像してイクイクしそうになってるのに？　それなのに、いやらしいのを俺のせいにするんですか？　理不尽ですよ、そんなの」

「やだ…やだやだやだ、訳分かんないこと、言わないで、くださいっ…！やだ…だあ…♡も、やだあ…えっちしたくない…ごわい…英知さん、怖いよお…！」

顔を隠して前かがみになり、手の平の隙間から涙を溢れさせながらあずきが悲鳴のような声を上げる。それと同時に、車がバック駐車され、エンジンが切られた。

「ほら、着きました。行きますよ」

「や、だあ…行かない…行かないです…もういい、一億、払います…っ、払う

から、もうおうち、帰るう…！」

「おうちはないでしょ？」

「う…あ…あ…」

ボロボロとあずきの目から大粒の涙が零れ落ちる。

「俺が潰して新しいマンションにしましたから、あなたが住んでいたボロアパートはもうない。あなたの家はもうないんです。それにあなたの新しい家は俺と一緒に住んでるここになったでしょ？　まだ理解できませんか、性奴隷さん。あなたにもう自由はないんです。俺のおもちやなんですよ」

「や…だ、いやあ…やだやだ、意地悪…英知さん、いちわる…だあ」

「ええ、俺は善人ではありませんから。女性から金をむしり取る悪い男なんです。可哀そうですね、そんな男に捕まってしまった。平和に一人で生きてきたのにねえ？」

「ぐう…ぐうう…え」

しゃっくりまであげて泣き続けるあずきは、運転席を降り、助手席に回って来た英知に横抱きにされる。

「や、だあ…」

「猫みたいに暴れないでください。俺、猫は嫌いなんですよ」

グイッと英知の綺麗な顔を押しつけるあずきの手を振り払い、英知が舌打ちする。

「なんで、そんなに私のこと虐めるんですか…嫌いですか、こんな惨めな女が…！」

「そうですね、イライラはします。見ていると、虐めたい衝動が無限に湧いてくるんですよ。本当に不思議です」

そう言いながら、英知は無意識にあずきの頬に自分の顔を摺り寄せていた。

「ほら、そんな涙と鼻水でぐちゃぐちゃな顔、ほかの人に見られたら、俺があなたを誘拐する犯罪者だと思われるじゃないでか、顔拭いてくださいよ、ばつちいですし」

「やだ…おうち、帰ります…!」

「もうないって言ってるでしょ。聞き分けなさい」

「うあ…あぁあ…」

英知はあずきを横抱きにしたまま、オーナー専用の最上階行きエレベーターに乗り込んだ。

「あ…う…う…?」

「あらあら、飛んじやいました?」

「う…?」

「ふふ…そうしていると、本当に子供のようにですね」

広いベッドルームの上。ガラス張りの寝室から見えるタワーマンションやビルが作り出す夜景の上には、蜜色の満月が昇っている。

「ふふ…こっちに来なさい」

「あ……」

英知の指と舌、そして大量の触手でまんこの中以外を激しく蹂躪されたあずきは、理性が吹き飛び、まるで幼子のように無垢な顔と、涎、涙、愛液、潮、そして触手の粘液でぐちゃぐちゃな体をゆつくりと動かし、口からダラダラと涎を垂らしながら、四つん這いで裸の英知に近付いていく。

「気持ち良かった？」

「あ…う」

コクリと頷くあずきに、英知が嬉しそうにほほ笑む。

一回も射精できないですよ？　もっと、こうやって、激しくするんですよっ

♡

「んぼお♡♡」

ごちゅごちゅごちゅごちゅごちゅごちゅごちゅごちゅごちゅごちゅ♡♡

「んぼお♡おごっ♡おっ♡おお♡んぶっ♡う…うえ…んごおお♡♡」

「汚い声…：…すごく、興奮する♡処女がそんな声出してるかと思うと、それだけで…ぐう…♡はあ…イキそうです♡はあ…はあ…喉、開いて…。奥まで突っ込んでから、食道に射精します…♡粘膜で俺のザーメンから直接たんぱく質、摂取してください♡」

ぶぼっ♡ぶぼっ♡ぶぼっ♡ぶぼっ♡ぶぼっ♡ぶぼっ♡ぶぼっ♡ぶぼっ♡ぶぼっ♡

「お…ごっ…っ♡っ…っ♡っ…っ♡っ…っ♡っ…♡」

「あはは♡喉奥にちんぽ突っ込まれても、体がビクビク♡って跳ねるくらいに

感じちゃうようになりましたねえ♡俺の触手から、いーっぱい食道粘膜に媚薬
粘液びゅーびゅー♡ってした甲斐があります♡おああ、イク♡そろそろ、イ
キますよ？ ちゃんと飲むんですからね？ 一滴でも零したら、子宮に直接ち
んぽハメ込みます」

「おっ…ごお♡ゾおごお♡♡♡」

「イク…イクイク…お…ゾオオおお♡♡♡♡♡」

「~~~~~♡♡♡」

英知があずきの顔をがっしりと掴み、下生えが唇に当たる程に強く押し当て
ると体を反らして気持ち良さそうに射精する。

「ぐ…う…はは♡すっごい…まだ…出る♡ぐ…ん…う…♡」

びゅくびゅく♡と吐き出される精液をゴリゴリ♡とあずきの口の粘膜に擦り
つける英知の瞳がドロリと蕩ける。

「ふう…はあはあ…あああ、最高…」

へこへこ♡と腰を振って射精を楽しんだ英知がずる♡と長大なちんぽをゆつくりと引き抜く。

「んぶう…！」

「吐き出すな」

「んぐう！」

口から大量のザーメンを吐き出そうとしたあずきの口を塞ぎ、英知が「飲め♡飲め♡飲みなさい♡」と耳元でいやらしく囁く。

「んぐ…ん…う…ん♡♡」

涙と鼻水でぐちゃぐちゃになった顔で、あずきが必死にドロドロのザーメンを胃に流し込んでいく。

「んお…お…ええ…うえ…おかあ…さ…」

「まだ、俺以外の人間に縋る元気があるんですか？」

「あ…ああ…ん」

じよろろ♡とあずきのまんこから尿が漏れ出し、じわじわと床を濡らしていく。

「あゝあ、お漏らしして、恥ずかしいですねえ。…俺の性奴隷になったのに、結婚相手なんか探そうとするからこういうことになるんですよ」

「う…あ…あ…」

ぼんやりとし始めたあずきの体を抱き上げると、英知は風呂場へと向かう。

「や…あ…もう、や…したくな…したくな…いい！」

「そんなの、あなたが決めることじゃありませんよ。…処女のおしっこ、いっぱい飲ませてくださいね♡」

「死ぬかと…おもっただあ…」

「声ガラガラじゃん」

翌日、あずきが目を覚ますと、広いベッドルームの横に置いてあるソファに寝転びながら、万緒が壁掛けのドデカいテレビでゲームをしていた。

「万緒君…？」

「英知さん、仕事に行ったから、僕が来た。体調は？」

「悪いです…」

「まあ、そんな声じゃ悪いだろうね。でも、目が覚めたら職場に連れてくるようにって言われてる」

「や、やだ！」

「僕に言われても…。英知さんの命令だから」

ゲームを終わらせた万緒がゆっくりとあずきに近付き、じっとその顔を見下

ろす。

「？」

「よくそんな顔してられるね？」

「んえ？」

「……酷いことされたんでしょ？」

「酷いこと……？」

「そう、頭おかしくなりそうな、いやらしーこと……、されてるでしょ？
英知
さんに」

「えっと……ひゃ……！」

万緒の指が、スリ♡とあずきの二の腕についた拘束の痕を撫でる。

「……助けてあげようか？」

「え……？」

身長の高い万緒がその場にしゃがみ込み、コテンと首を傾げる。

「英知さんから逃がしてあげる。どっか遠く…英知さんが追いかけてこられないような所。英知さんに会う前の…平凡で幸せな生活に戻してあげるよ？ 僕なら…できる」

「万緒…君？」

「ね？ いいでしょ？ その代わり…」

にじり寄って来た万緒があずきの顎を掴み、ゆっくりと唇を重ねようとした。

「……なんで？」

「えっと…」

万緒の唇にあずきの手のひらが押し当てられる。万緒の眉間に少しだけ皺が寄った。

「あんなに泣いて…可哀そうだった。僕なら甘やかしてあげられるよ？」

「泣いてって…なんで知って？」

「英知さんに喉奥までちんぽ突っ込まれてごちゅごちゅされて、可哀そう」

「な、な、何で知って!？」

「結局、お風呂でおしっこは飲まれちゃったの？」

「ひいひいん！ 英知さん、英知さん、英知さん！」

「ああ、うるさいなあ」

迫ってくる真顔の万緒に恐怖を感じたあずきが、大声で名前を呼ぶと、扉を足で蹴り開けた英知がくわっとあくびをしながら入ってくる。

「変態しかないいいい！」

「…僕、おしっこ、気になるんだけど」

「英知さああん！」

「はいはい、朝からうるさいですよ」

ベッドの反対側からしゃしゃかと高速で移動し、英知の体にびよんと抱き着いたあずきが、ひんひん泣きながら英知の胸に顔を埋める。英知は溜息を吐きながらも、あずきのお尻を片手で支え、あずきの髪を指でクリクリと弄っていた。

「万緒、また俺の寝室に盗聴器仕掛けましたね」

「はい」

「やめてくださいって言いましたよね？」

「やめてくださいって言われた時はやめました」

「もう3回目だと思いますが、やめてください」

「分かりました」

真顔の万緒がスタスタと歩き出して、ベッドの下に手を伸ばし、張り付けて

いた盗聴器を回収した。

「…一応盗聴器を仕掛けた理由を聞きます」

「何か弱みが欲しくて。オーナーに成り代わりたいです」

「…弱みは見つかりました？」

「あずきとのセックス、ご馳走様でした。とても美味しかったです」

「うえ…万緒、万緒君は、味方だと思ってましたあ…！」

「…あなたってホントにバカなんですね。万緒のプレイスタイル知らないんですか？」

「うう…縛って縛られ拘束プレイ♡犯罪ギリギリの痛めつけプレイでお互い昇天寸前までイッちゃいましょう♡スタイルです…」

「そんな男がまともな訳ないでしょ。ほんと馬鹿」

「ぐえ………日常に戻りたいい…」

自分にしがみついてエンエンと泣き続けるあずきを、英知は何とも言えない顔で見下ろす。

「…朝食ありますから、さっさと食べますよ」

「うう…ジャムトースト…」

「あなたが食べたいって昨日お風呂で喚くから、わざわざ俺が買ってきてあげたんですよ、この間抜け」

「ひえん」

あずきががっちり抱き着いているのを振り払いもせず、英知が寝室から出て行くのを見て、万緒は「ふうん」と言いながらその後が続いたのだった。